
推理作家と名探偵

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

推理作家と名探偵

【著者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

5年前に起きた二つの事件に異色のコンビが挑むラブコメ要素が詰まった物語。

++ プロローグ ++

今から5年前。都内のある廃ビルで殺人事件が起こった。

被害者は、田村^{たむら}吉彦^{よしひこ}32歳。都内の銀行に勤める職員である。

事件当日午後6時頃、彼は何者かに因つて呼び出され、殺されるとも知らずにノコノコとやって来て、待ち伏せしていた犯人と鉢合わせ。正面から腹部を包丁で刺されて間も無く死亡した。

そして同じ頃、彼が生前勤めていた銀行でも事件が起こっていた。それは、覆面で顔を覆つた一人の男が拳銃を持つて押し入り、銀行から現金150,000,000円を奪つて逃走したと言う事件だ。

警察は両方の事件に関連が無いか調べたが、未だに詳細は不明。

そして、5年の月日が流れ・・・。

名探偵がやって来た！

有名な推理小説作家のおのひでのき 小此木 遥。

彼女は都内のとあるアパートに住む現役の高校生だ。

そんな彼女が、部屋の壁に設置された液晶テレビでニュースを観ていると、画面に有名な高校生探偵、鷺ノ宮 優助の映像が映され、画面右上に「あの名探偵、またもや事件解決！」と言つテロップが表示された。

「へえ、名探偵かあ」

遥は頬をほんの一寸だけ赤らめて「ヤーヤした。

「会いたいなあ」

ピンポーン と、部屋にチャイムが響く。

遥はテレビを消すと直ぐ様玄関に駆けてドアを開けた。外には、先程画面に写っていた人物が立っていた。

「えつ・・・・？」

硬直する遙。

「あの、作家の小此木さんですね？」

遙は興奮した。

「あっ、あなたはあの有名な高校生探偵の！初めてまして、小此木 遥です！」

遙はそう言つてお辞儀をし、顔を上げて訊ねる。

「それで、あなたの様な御方が私にどの様な御用件で？ すると優助は便箋を取り出し、遙に差し出した。

「何です？」

遙は便箋を取り、開けて中から紙を取り出した。

「えつ、ええ！？」

遙は声を張り上げ、頬を真っ赤に染めた。

（「こ、これってラブレターじゃん！」「んなの私なんかが貰つて良いのー？」）

戸惑う遙。

「あの、やつぱり、駄目ですか？」

優助は恐る恐る訊ねた。

「中入つて！」

遙は優助を強引に中へ引き入れ、ドアを閉めて施錠し、部屋の全ての窓とカーテンを閉めて電気を点け、彼をリビングに案内して席に着かせ、お茶を用意した。

「あの、何でこんな事……？」

その問いに遙はバンツと机に両手を置き、

「何で？って、マスコミに見られたら大変な事になるじゃないですか！」

と怒鳴り散らした。

優助はあまりの声のでかさに耳を押さえた。

「で、私と御付き合いしたいと言う事だけど、私なんかで良いのか何で私ん家知ってる訳？住所や電話番号等の個人情報は一切公開しない筈だけど……？」

「あの、先ず落ち着いてくれません？順番に話すから」

遙は深呼吸をした。

「えっと……じゃあ、最初に私ん家を知ってる訳を聞かせて？」

「それは一寸……」

「ふうん。言えないんだ？」

遙は不適に微笑んだ。

優助は俯いて答える。

「す、ストーカーしてたんです」

「えつ？」

「1ヶ月前、出版社から君が出て来たのを見掛けて、可愛いなって思つて、後を付けたんです」

（嘘、全然気付かなかつた……）

「それで、家が解つたから、今度は出版社に行つて何してる娘か聞いたんです。そしたらあの本書いてる娘だつてのが解つて……」

あ、この本読みましたよ

優助はそう言つて一冊の推理小説を取り出した。

「へえ、読んでくれたんだ?」

「まだ途中だけどね。この他にも家に沢山ありますよ。俺、小此木さんの大ファンだから」

「あら奇遇ね。私もあなたの大ファンなのよ。・・・って、この話は置いといて、何でもっと早く来なかつたの?」

「タイミングが合わなかつたんだ。ここのこと、事件続きで時間が無くて・・・」

「・・・成る程、だから今日な訳ね」

「はい。それで、お返事の方は?」

（そうね。悪く無いかも。だつて彼と付き合つてれば事件が転がり込んで来る訳でしょ?で、彼が解いた事件を私が小説にして出版社に売り込む。うん、儲かるわ!）

チャキーン! 遙の両目が両さんの如く￥に成る。

「良いわ! あなたと付き合つてあげる!」

「えつ、ホントに良いの! ? 何か夢みたいだな

「ホツペ抓紧てあげる」

遙はそう言つて立ち上がり、優助の頬に手を伸ばして思いつ切り抓つた。

「いででででつ、夢じゃないです! てか放して! -」

「嫌だ。後1時間は続けるわ。ストーカーした罰よ

「傷害罪で訴えるぞ」

「ストーカーもいけない事よ?」

言葉に詰まる優助。

そうして1時間が経ち、優助は解放された。

「それじゃあ、俺帰ります」

優助はそう言つて席を立つて玄関に向かう。

（あ、駄目。行っちゃ駄目! ）

そう思つた遙は咄嗟に優助の下に駆けて腕を掴んだ。

「あの、もつ少しだけ、ゆっくりしてくれると、嬉しいって言うか……。否、良いのよ？あなたが忙しいなら（つて、何引き留めてんのよ私は！？）

「解った。君がいて欲しいなら、暫くいてあげる」「えつ……？」

刹那、遙の頬が赤く染まり、心臓がバクバク高鳴る。（ちょっ、何この展開！？夢なんかじゃないよね！？）てか落ち着け私の心臓！）

「ん？顔が赤いけどどうしたの？」

「嘘！？」

遙は慌てて顔を両手で覆つた。顔が火照つて汗を搔いている。

「ごめん、やっぱ帰つて？」

そう言つと、遙は顔から手を退けて優助の背中を押して玄関まで行き、鍵を開けて外へ追い出し、「また明日ーそこの角にある公園で待つてるからー」と言つて靴を渡し、ドアを閉めた。

遙はドアを背にして寄つ掛かり、「はあ・・・」と溜め息を吐いた。

同じ頃、都内の廃ビルでは、ある男がセーラー服の女子高生に襲われていた。

「やめろ！助けてくれ！」

男は叫んだ。

しかし、此処は屋内。しかも外に音が漏れない仕組みなので、当然男の叫び声等聞こえやしない。

「うわっ！」

男は躊躇って転んだ。

女子高生は男を殺意に満ちた顔で見つめ、持っていた金属バットで男の頭を殴り付けた。

「うつ！」

男は呻き声を出して意識を失つた。

女子高生は動かない男に対して何度も何度も繰り返しバットで殴り付ける。

そして気が付くと、男は血まみれの肉の固まりと化して死んでいた。

女子高生は血まみれのバットを捨て、徐にその場を跡にした。

殺人発生

翌朝、遙は自宅近くの公園のベンチに座つて文庫本を読んでいた。本を読んでいるのは、優助が来る迄の時間潰しである。

「おーい

と、優助が駆けてきた。

遙は読んでいた本にしおりを挟んで閉じた。

「遅い」

「スマン。寝坊した」

遙は優助を睨んだ。

「怒ってる？」

「別に怒つてませんよ」

「行くつて何処へ？」

「で、デートに決まってるでしょ！」

遙は頬を赤らめながら言った。

「まさか、昨日の今日でもうプランを？」

その問いに遙は、バッグに本をしまい、映画のチケットを2枚出した。

「それつてもしかして！？」

優助は強引にチケットを奪取した。

「これ人気が高くてなかなか手に入らない例のチケットじゃん！何処で手に入れたんだ！？」

「貰つたのよ。出版社の人。原作者名見て」

優助はチケットの右下辺りに小さく書かれた原作者名を見た。そこには小此木 遥美とある。

「それ、私のママがデビュー当時に書いた推理小説の実写映画『えつ、小此木さんってあの小説家の娘なの！？』

「そうよ。知らなかつた？」

「うん、知らなかつた」

「そんな事より、早く行こう。時間無くなっちゃう」

遙はそう言って振り向いた。

優助は頷き、遙の横に付いて共に歩き出した。

一人は公園を跡にして暫くすると、今は使われておらず、近い内に取り壊しが決まっている廃ビルの前を通り掛かつた。

そのビルの前には、頭に赤いランプを載せた白黒のツートン車が数台、ハザードをたいて止まっている。

「ねえ、鶯ノ宮くん？ 一寸邪魔してみない？ 事件かもよ？」

「えつ、でも映画が」

「そんなの別に今日じゃなくとも大丈夫よ」

遙はそう言いつと、優助の手を掴んで、廃ビルの入り口に張られたKeep Outと書かれた黄色いテープの前にいる警官の所に駆けた。

「お巡りさん、此処で何かあつたんですか？」

警官はキヨロキヨロと辺りを見回すと、小声で言った。

「（実は先刻、此処で殺人事件が遭つてね。今捜査中なんだ）」

「殺人事件ですか！？」

遙は眼をキラキラと輝かせた。

「あのつ、その事件の捜査に協力させて頂けませんか！？」

「ダメダメ、これは警察の仕事だから。それに、現場をウロチョロして荒らされでもしたら困るから」

遙は困った顔で後ろを振り向いた。

優助がいない。何処に行つたのだろうか、疑問符。

遙は閃いて頭に電球を浮かべると、警官の方に向き直つて手を掴み、その手を自分の胸の上に導いた。

「ちよつ、君！？」

警官は顔を真っ赤に染め上げた。

「触りましたね？お巡りさん」

遙はそう言って息を大きく吸い込み、叫ぼうとしたが、慌てて警官が彼女の口を塞いだ。

「（どうして欲しいんだい？）」

遙はニッコリ笑顔でこう言つ。

「中に入れてくれないかな？」

警官は仕方があるまいと、黄色いテープを持ち上げた。

「痴漢」

遙はそう言ってテープを潜つて中に入つて行つた。

勿論、この警官が遙に対して殺意が芽生えたのは言つまでも無い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7589c/>

推理作家と名探偵

2010年10月12日15時42分発行